

文化学園服飾博物館 だより

第16号 2003.4.1



新博物館の外観



2月5日に行われた竣工式でのテープカット
(中央：大沼 淳 文化学園理事・館長)

◇ 21世紀の服飾博物館 ◇

学校法人文化学園創立80周年記念として、甲州街道に面し20階建の新校舎と並ぶ新宿文化クイントビルの1,2階に、新しい服飾博物館が誕生しました。旧館とほぼ同じ展示面積670㎡で、明るくモダンな建物となっており、日本における21世紀の服飾文化創造の拠点として、これからさまざまな斬新な企画が実現されます。

一般的にいえば、今、全国の博物館は冬の時代を迎えています。建物は立派でも所蔵品が貧弱で資料の借用や展示に費用がかかり、運営維持の困難や入館者の減少から閉館に追い込まれる館も少なくありません。新博物館の開館にあたっては、荒海に乗り出すような緊張感をおぼえますが、小さくとも目的意識のはっきりした役に立つ博物館として育っていけばと願っています。

服飾博物館の所蔵品はデータベース化されて館内で公開され、一部はインターネットにのせられています。膨大な数量の服飾資料を有する当館がデザインセンターとして、服飾関係者はもちろん服飾以外の分野の人々にも活用されることが望めます。また服飾の教育・研究の拠点として、今まで以上に多くの研究者や学生が訪れることでしょう。若い世代の多くはすでに養蚕や絹の読み方や意味が分からなくなっていますが、彼らなりのすぐれた感性を持ち合わせています。当館で服飾の基本を分かりやすく楽しく学べ、小中学生の体験学習や異文化理解、高齢者の生涯学習に対して効果的な場を提供することも服飾博物館の社会的使命の一つです。そのためには博物館を心安らぐ空間とし、何度でも訪れたい場にしなくてはなりません。

またファッションの新しい動向や様々な催しなどの情報が得られるとともに、学園の研究成果を目に見える形で興味深く展示したり、歴史的な資料の展示と現代の作品を組み合わせ、歴史を21世紀の創造活動へ役立たせ、未来の服飾のあり方への考察を深めクリエイションのヒントが得られる場とすることが望めます。さらに着物文化の振興、伝統染織の復元、民族衣装の復興・保存活動への支援も大切にしたいと、夢は際限なく広がっていきますが、服飾博物館の歴史には一步一步着実な歩みを刻んでいきたいものです。

来館の皆様をはじめ、服飾博物館をとりまくすべての人々とともに育っていく博物館でありたいと、皆様のご支援を心からお願い申し上げます。

道明 三保子 (文化学園服飾博物館学芸室長・文化女子大学教授)

’02年度 活動報告

◇ 展 示 ◇

【デジタル・アーカイブ開設記念 ファッションとモード誌】

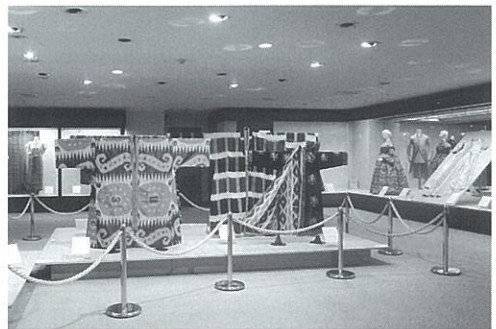
4月5日～5月31日

博物館と図書館のデジタル・アーカイブ開設記念として両館の共催で、18世紀から20世紀の女性のファッションの歴史を、博物館の実物資料と図書館所蔵のモード誌でたどりました。『ヴォーグ』の表紙や記事に掲載されたファッション写真と実物のドレスなど、普段目にすることの少ない貴重書と実物資料を合わせた展示は、服飾を専門とした両館の特徴を生かした文化学園ならではの企画でした。



【世界の 絛】 6月19日～9月13日

日本をはじめ、東南アジアや西アジア、中央アジア、ヨーロッパなど、約15か国、約120点の様々な絛を展示しました。幾何学的な文様の絛から、動物や植物をモチーフとした絵画的なものまで、世界各地の多彩な絛が一同に集まりました。共通の絛という技法を用いながらも、色づかいや文様の表現など、それぞれの地域や民族によって大きく異なり、さまざまな価値観や伝統を見直す良い機会となりました。



【能装束と役柄】 10月4日～11月22日

当館は彦根・井伊家の能装束を多数所蔵していますが、本展では能装束を染織工芸として見るばかりではなく、役柄との関係に着目し、身分や年齢の異なる男役や女役、神、霊、精、鬼などそれぞれの役柄に応じた能装束を紹介しました。それぞれの演目の中での役柄と装束の関係を理解するのはなかなか難しかったようですが、能装束独特の文様、高度な染織技術など興味深く観覧いただけたようです。



【動物素材の服飾】 12月11日～’03年2月28日

獣から得られる毛皮や皮革、骨や牙、鳥の羽根、真珠貝や宝貝、魚の鱗や亀の甲羅から取るべつ甲、虫の羽にいたるまで、自然のもつ装飾性や呪術性をそなえた材料の特性を生かしながら世界各地の人々がどのように服飾に取り入れたのかを紹介しました。多くの来館者が毛皮や鳥の羽根の多彩な美しさに感嘆し、鳥の嘴や魚の鱗、玉虫の羽にはその特異性に驚かされた様子で、ユニークな展示であると大変好評でした。



◇ 外部協力 ◇

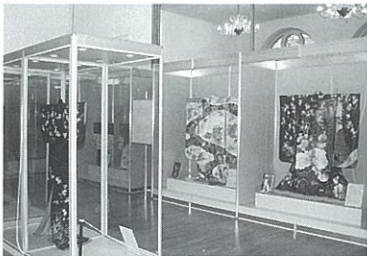
明治神宮「明治宮廷の洋装」展に協力

5月18日より7月1日まで、明治神宮文化館宝物展示室で開催された明治神宮主催の「明治宮廷の洋装」展に協力しました。この展示は、今年が明治天皇生誕150年の記念の年に当たることから企画されたもので、宮中の儀式の際に着用された礼服を中心に20点余りが展示されました。当館は昭恵皇太后のドレスをはじめ5点の所蔵品を出品しました。また、すべての展示品の着せ付けを行うなど全面的に協力しました。

「日本の着物 デザインと美意識」開催

10月11日～21日までルーマニアのブカレスト市立博物館にて「日本の着物 デザインと美意識」展を開催しました。この展示は、日本・ルーマニア協会とルーマニア文化財団主催の「ジャパン・フェスティバル」の一環として行ったもので、服飾博物館の所蔵する明治時代から昭和初期にかけての着物など20点近くを展示しました。オープニング・レセプションにはルーマニアのイリエスク大統領と紀宮清子内親王殿下がご列席され、スピーチをされた後、熱心に展示をご覧になられました。また道明学芸室長の講演会「日本の着物」も行われ、多くの人々が訪れました。

ルーマニアでの展示の後、10月27日～11月27日まではブルガリア国立民族学博物館（ソフィア）で展示をしました。国立民族学博物館とは'96年の服飾博物館での展示「ブルガリアの女性と伝承文化」の開催をきっかけに交流を続け、このたび日本大使館の主催する「ジャパン・ウィーク」の事業の一つとして、念願となつての展示となりました。オープン当日には市橋康吉在ブルガリア日本大使、テネバ国立民族学博物館長がスピーチされ、和やかな雰囲気の中での開幕となりました。



展示の様子



展示をご覧になるイリエスク大統領と紀宮清子内親王殿下



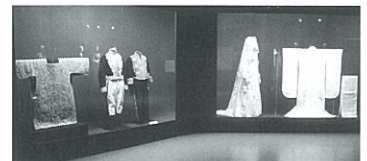
スピーチされる市橋康吉在ブルガリア日本大使（中央）、
テネバ国立民族学博物館長（左）

国立科学博物館「光を楽しむ－サイエンス・アート・ファッション」展に協力

上野の国立科学博物館において10月31日から12月8日まで開催され、文化学園が共催した「光を楽しむ－サイエンス・アート・ファッション」に服飾博物館はファッションの分野の展示に協力しました。この展示はどちらかというと堅いイメージのある科学博物館において、「光」を自然科学という面からだけでなく、芸術やファッションという感性の面からも考えるという新鮮な試みとして注目されました。

服飾博物館は展示の中の「光とファッション」のコーナーに収蔵品32点を出品しました。衣装と光の演出効果の関係に着目し、金銀糸や絹を多用した厳粛な光が着用者の威厳を高める「儀礼服」、ビーズやスパンコールによるきらめきが華やかな雰囲気を演出する「イヴニング・ドレス」、縹子や紵と組み合わせた金糸の輝きが幽幻さを醸し出す「能装束」といったテーマで展示しました。また、光る原理を目で見てあるいは触って理解できるように文化学園ファッションリソースセンターが所蔵する各種の織物や加工生地を博物館の所蔵品と併せて紹介しました。

展覧会はNHKのニュースをはじめ、新聞各社、雑誌に多く取り上げられ、寒い時期の短い期間にもかかわらず、3万5千人余りの入館者数となりました。



儀礼服と婚礼衣装



1920年代のイヴニング・ドレス

’03年度 展示案内

今年度は文化学園創立80周年・新博物館開館を記念し、服飾博物館所蔵品の中から、日本、ヨーロッパ、アジアなどの各地域の名品をご紹介します。

【三井家の着物 ― 江戸・明治・大正 ―】 3月29日～5月16日

三井家は江戸時代には呉服商と両替商を営んで豪商と称され、明治時代から昭和戦前期には事業を拡大し財閥を形成しました。当館は三井家に伝来した着物を多数所蔵し、それらは名品として高い評価を受けています。三井家の江戸時代の着物の多くは、円山派の絵師が関わったと考えられ、写実性を取り入れ、それまでの着物には見られなかった新しい意匠が表現されています。これに明治、大正時代の着物を加え、また、現存する下絵も併せて出品します。



小袖 江戸時代後期 三井家旧蔵

【宮廷衣装 ― 近代の装束と洋装 ―】 6月6日～8月5日

日本の近代の宮廷衣装には、平安時代より受け継がれてきた伝統的な装束と、近代化の過程で導入された洋服との二つの系統があります。束帯や十二単(唐衣裳)に代表される装束は、独特の文様や色調の典雅な服飾であり、一方、洋服は当時のヨーロッパの宮廷服になったもので、これらは宮廷のさまざまな儀式や行事に応じて着用されました。本展では幕末・明治維新から昭和戦前期までを取り上げ、大正天皇の御祭服、皇族の束帯と十二単、明治天皇の皇后(昭憲皇太后)と秩父宮勢津子妃の大礼服などをはじめとする宮廷服を紹介します。



十二単 昭和3年 賀陽宮敏子妃着用

【西欧のハイ・ファッション】 9月3日～11月11日

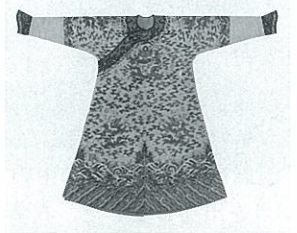
西欧における宮廷貴族や上流社会の人々の装い、オートクチュールのデザイナーの作品などをハイ・ファッションと呼んでいます。それら最高級のファッションが各時代の流行をリードしてきました。本展では西洋関係の館蔵品の中より、18世紀のロココ時代から1960年代にいたるまで時代の最先端を彩ったハイ・ファッションを紹介します。またイギリスのエドワード7世の後、アレクサンドラ王妃のイヴニング・ドレスも初公開します。



ドレス イギリス 1760-70年代

【アジアの服飾 ― 守り伝える民族の心 ―】 11月28日～’04年2月25日

民族服飾には各国、各地の風土、歴史、生活様式、世界観や宗教観に育まれた民族独自の美意識が反映されています。形、文様、色それぞれに意味を持たせ、自然への畏敬や神々への信仰、自己の社会的な立場などを示しています。本展ではアジア各地の民族服飾の中から、民族の美意識が色濃く映し出され、またそれらを表現する染織技術にも優れた宮廷衣装や儀礼服を中心に紹介します。



龍袍：ロンパオ 中国 18世紀中頃

* 以上の予定は都合により変更されることがあります。

文化学園服飾博物館 だより 第16号

編集・発行 文化学園服飾博物館
東京都渋谷区代々木 3-22-7
新宿文化クイントビル
TEL. 03-3299-2387